

姫路獨協大学同窓会報

発行所／姫路市上大野 7-2-1 姫路獨協大学同窓会
TEL (0792) 23-9263 FAX (0792) 23-6513

回想録



今年度末をもって退職される先生方よりお言葉を頂きましたのでここに掲載させていただきます。
長い間お世話になり、ありがとうございました。

一般教育部
桑原 知子 先生



姫路獨協大学を 退職するにあたって

この3月31日を以て、11年間勤めた姫路獨協大学を退職して、4月1日より京都大学大学院教育学研究科助教として赴任することになった。京大は母校でもあり、すでに慣れ親しんだところであるはずなのに、なぜか緊張感をおぼえる。辞めることが決まって以来、姫路駅に降り立つたばいになつかしい気持ちでしたり、大学の部屋から木々を眺めるたびに切なさを感じたりもする。

姫路獨協大学は、私にとって、社会人としての第一歩をふみだしたところでもあり、私の30代の人生と重なって、すでに私の一部となつていようである。そこから出ていかねばならない。そう思う時、姫路獨協大学に対して、愛着というか、いとおしさに似たものを感じるのである。大学に対して、最初からこうした感情をもっていたわけではない。もちろん、私は意気揚々と姫路獨協大学に赴任したのだが、最初から「こけた」。4月の一週目、私は「水ぼうそう」などというとうんでもない病気にかかって、3週間学校を休まねばならなかった。それが私の社会人第一歩の思い出である。あはたを残した顔で、大学に姿をみせた私を待っていたのは2科目（心理学と精神の科学）を合わせて800人をこえる受講生だった。401D教室でそれはそれはにぎやかなこと。後ろの方では、ヘッドホンで音楽を聞きながらトランプをしているし、「聞こえへんやーん」という声があるので「あつ、聞こえませんか?」と言うと、「あつ、こっちの話」と返された。私は、呆然と立ちすくすしかなかった。何よりショックだったのは、レポートに書かれた内容だった。ほとんどの人が、希望してこの大学に入ってきたわけではないこと、入ったからも絶望的な気分であること、受験の失敗が傷として残っていることが書かれてあったからである。

それでも私はどうすることもできなかった。全く講義を聞いていないわけでもないらしく、「単位」とか「試験」という言葉が発すると水をうったように静かになる。私は何か「戦つて」いるような気にさえなつて、悲しさをおぼえていた。当時私にとつて救いだつたのは、無単位で開講されていた基礎ゼミ（現在は、単位がつく一般教育基礎演習）である。単位が与えられないのに毎集合まってくるメンバーだけに、彼らは生き生きとしていたし、私も若かつたこともあつて、合宿をしたり、学祭で店を出したりして、エネルギーを注ぎ込んだ。ゼミにおいて、私がめざしたのは、「自分を表現」することである。受験の失敗という傷のせい、か、もつと以前の傷手のせい、か、姫路獨協大学の人たちは、「自分」をだすことをとても恐れているように感じた。自分を表に出して傷つけられるのはまっぴらごめん。だから、殻の中に隠れていよう、という感じである。けれど、それでは、自

9期生の皆さん、 卒業おめでとう ございます。

この春をもって卒業される皆さんとともに姫路獨協大学をあとにされる先生方からのメッセージを綴りました。過ぎ去りし時にしばし想いをはせてみてはいかがでしょうか。

INDEX

回想録	○野口名隆先生	4
○桑原知子先生	1	
○古藤友子先生	2	
○小西典美先生	3	
○齊藤俊英先生	4	
○戸田五位先生	4	
○永合行先生	4	
○山本輝夫先生	5	
同窓会副会長あいさつ	5	
会計報告		
同窓生のお店紹介		
同窓生だより	6	
OB・OGからのメッセージ		
etc...		

分を表現するというあの喜びを感じることができない。実際以上に自分を過少評価して（これは同時に、もしもだったら自分はずすごいことができるのに、という幻想を伴なっている）、自分を抑え込んでしまっている人たちは、「関係」をつくることも難しい。そこで、ゼミでは、少しずつ「自分を表現」する喜びを知ってもらうようにした。一年の最後には「発表会」も行なう。今でも発表会のビデオが残してあるが、劇、音楽、美術など、いろいろな仕方で自分を表現したものはどれもすばらしいものだった。この「桑原ゼミ」は独自に同窓会も毎年開催していて、今やそのメンバーは200人を越えている。ゼミのメンバー同士で結婚した人もいたり、子供も誕生している。「子供ができました」という写真をみせてもらうと、何だか孫（？）ができたような、うれしい気持ちがある。こうして、ゼミでは、何とか「関係」をもつことができるようになったが、大教室の授業は、授業に行く前に気分がめいるようにさえなっていた。アンケートもとってみた。「どういう時に私語しますか？」「しゃべりたい時」「何を話しますか？」「しゃべりたいこと」という答えだった。私は、どうすることもできなくて、私の大学時代の恩師である河合隼雄先生のところへ相談に行った。その時先生は「たい

へんやなあ。そやけど、まず学生のこと好きにならんとな」とおっしゃった。これを聞いて私はハッとさせられた。それまで私にとって学生は「敵」だったからである。それからは、私はともかく相手を知りたいという考えから、毎週レポートを書いてもらうことにした。書く方も大変だったろうけど、毎週何百枚というレポートをみて、コメントを書いて、返すという私の方の作業も大変だった。いつもホテルに泊りこみ。夕方6時にホテルに入り、すべて見終えるのは深夜2時だった。たいへんではあったけれど、何だか少しづつ「関係」が変わってきたような気がした。（11年間このレポート読みを続けたおかげで、速読術も身についた。）

夢の実習では、夢を記録してもらってそれに対して私がコメントをしたりして授業を行なってきた。一度、まとめて夢を300ほどよんでコメントしたらその晩うなされてしまった。夢が夢、夢、夢となって押しよせてくる夢をみてしまった。それ以来このコメントだけは時間をかけて書くようにしている。

それにしても学生の人たちがよくがんばってついてきてくれたなあと思う。秋頃になると春とくらべて、レポートの書き方が断然進歩してくる。出席率も高くなるし、私話もほとんどな



くなっていた。しんどかったという気もちより、私の方が多くのものを与えてもらったという感じだけが残っている。私は姫路獨協大学に勤められてほんとうによかったと思っているし、多くのことを学生の人たちから学ばせてもらった気がしている。

私も卒業生の人たちと同じように、姫路獨協大を巣立つことになった。新しい世界へ向かうのは、不安と期待が入り混じった複雑な感情を呼び起こすのだけれど、大学で受けとってきたエネルギーを財源として、次なる世界への扉を思いきってあけたいと思う。

卒業生の人たちにとっても、姫路獨協大学での思い出が、貴重な財産となるよう祈念しながら、本稿を終えたい。



外国語学部 日本語学科
古藤 友子 先生

9期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。この春、私も皆さんと一緒に12年間お世話になった姫路獨協大学を巣立つことになりました。

姫路獨協大学の思い出はたくさんありますが、中でも学生の皆さんと過ごした時間は忘れることができません。皆さんから多くのことを学び、また教員という仕事を続ける勇氣と喜びを与えられました。そのことから感謝しております。

これからも皆さんの思い出を大切に、仕事をしていきたいと思えます。またお目にかかる日を楽しみにしております。

（4月からの連絡先）
〒一八一八五八五
東京都三鷹市大沢三二〇二二
国際基督教大学 ERB327
〒〇四二二一三三二四八二
e-mail: F.Y.S.Kooh@icuc.ac.jp (研究室直通)

教務課からのお知らせ

〈各種証明書の手続き方法〉
 自宅が大学から近い場合は、直接教務課窓口に来て手続きをして下さい。発行まで手続きから約3日かかります。
 自宅が遠い場合には、郵送で手続きをして下さい。郵送の場合、メモ用紙に学部・学科、学籍番号、氏名、連絡先、生年月日等を記入し、手数料分の郵便小為替と返信用の封筒と切手を同封し、教務課宛まで送って下さい。（英文の証明書の場合は、使用目的と提出先を記入して下さい。）
 何か分からない点がありましたら、教務課（0792）23-6504までご連絡下さい。

主な証明書の手数料

①成績証明書・卒業証明書（和文）	各100円
②成績証明書・卒業証明書（英文）	各500円
③資格等単位修得証明書	各300円

